1　研究主題

自分の思いや考えを伝え合う子どもの育成
～ 「話すこと・聞くこと」の指導を通して ～

2　主題設定理由

(1)　今日的課題から

知識基盤社会の到来や，グローバル化の進展など急速に社会が変化する中，次代を担う子どもたちには，幅広い知識と柔軟な思考力に基づいて判断することや，他者と切磋琢磨しつつ異なる文化や歴史に立脚する人々との共存を図ることなど，変化に対応する能力や資質が一層求められている。一方，近年の国内外の学力調査の結果などから，我が国の子どもたちには思考力・判断力・表現力等に課題があることが指摘されている。

新しい学習指導要領では，改正学校教育法や中央教育審議会答申を踏まえ，児童に生きる力を育むことを目指し，創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ，これらを活用して課題を解決するために必要な思考力，判断力，表現力その他の能力を育むとともに，主体的に学習に取り組む態度を養い，個性を生かす教育の充実に努めることが求められている。また，その指導に当たって配慮すべきこととして，言語環境を整え，言語活動の充実を図ることに配慮することが求められている。

言語は知的活動（論理や思考）の基盤であるとともに，コミュニケーションや感性・情緒の基盤でもあり，豊かな心を育む上でも，言語による双方向的な意思伝達の能力を高めていくことの重要性が更に高まっている。

(2)　学校教育目標の具現化から

本校の学校教育目標は，「心豊かで，自主性・創造性に富み，たくましく生きる力を身に付けた子どもの育成」である。この目標は，知・徳・体の調和的発達と「生きる力」を身に付けた子供の育成を目指したものである。

そのため，本校では，「確かな学力」「豊かな心」「たくましい体」の調和を重視した教育活動を推進している。

しかし，全国学力・学習状況調査の結果から，基礎的・基本的な知識・技能については，概ね身に付いていると考えられるが，知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力が十分身に付いていないことが課題として明らかになっている。

こうしたことを踏まえ，確かな言語能力や言語意識を養えば，お互いの思いや考えを言葉で伝え合う力が育ち，思考力・判断力・表現力等を育むことができ，学校教育目標に迫ることができると考える。

(3)　児童の実態から

本校の児童は，全国学力・学習状況調査の結果を見ると，基礎的・基本的な知識・技能身に付いていると考えられる。反面，国語科Ｂ問題の正答率が，他に比べて低い状況にある。つまり，知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力が十分身に付いていない状況にある。

また，日常の様子を見ていると，自分の思いや考えを他者に対して表現したり，他者の思いや考えを正確に聞き取ったりすることが不得意な子どもが多い。

これは，「話すこと・聞くこと」領域を中心とした学習のしつけが徹底されていなかったことや，「話すこと・聞くこと」領域における伝え合う力を高めるための指導が実生活に生きて働くものとなっていなかったことが理由として考えられる。

「話す」「聞く」活動は，その発生の順序から見ても，あらゆる言語活動の基礎となるものである。更に，我々は自己と対話する形で思考・判断をしているという点を考えると，論理的な話し方を身に付けることは，思考力を向上させる上からも重要である。

このような理由から，本主題を設定し，「話すこと・聞くこと」領域の指導に焦点を絞って指導法の研究を行うこととなった。

３　研究主題について

(1)　研究主題のとらえ方

ア「自分の思いや考え」とは

「自分の思いや考え」とは，様々な体験や欲求などから生じる内発的な動機に支えられたものであり，具体的な相手に対して，子どもたちが伝えたい思いや考え，意見などのことである。

イ「伝え合う」とは

「伝え合う」とは，伝えたい相手に自分の思いを伝えたり，相手の思いを聞いて理解したりするなどの双方向的な言語活動のことである。また，そこから相互理解が深まったり，新たな活動が展開されたりする姿である。

(2)　目指す子どもの姿

◇自分の思いや考えを，自分なりの言葉で相手に分かりやすく話すことができる子ども
　話す音量や速さ，間の取り方などの話し方だけでなく，相手や目的，意図に応じ，伝えたいことを的確に話すことができる子ども

◇自分の考えと比較しながら，正確に聞き取ることができる子ども
　相手の話の中心や意図を的確に聞き取り，さらには双方向的な話し合いにつなげていくことができる子ども

◇お互いの考えを言葉で伝え合いながら，積極的に話し合うことができる子ども
　自分の意図や立場をはっきりさせながら，積極的に話し合うことができる子ども

４　研究の仮説

【仮説１】 「話すこと・聞くこと」の領域における基礎的・基本的事項を確実に身に付けさせる手立てを工夫すれば，子どもたちの確かな言語能力を高めることができるであろう。

国語科の「話すこと・聞くこと」の領域における基礎・基本を児童に確実に身に付けさせるためには，一時間一時間の授業で何を学習するのか，児童にどんな力を付けさせるのかを明確にする必要がある。そこで，各学年で身に付けるべき基礎的・基本的事項を洗い出し，確実な定着のための手立てを工夫することが必要であると考える。

また，主体的な学習活動にするためには，子どもたちに学習の見通しをもたせる必要がある。そこで，単元構想図を作成・掲示することで，学習の見通しをもたせるようにしたい。

「伝え合う力」を育成するためには，子ども自身がだれに向かって何のために伝え合うのかといった，相手や目的が明確になっていなければならない。また，どのような場面や状況において伝え合う活動をするのかといった場面や状況を子ども自身が理解しておく必要がある。このことは，学習の場を臨場感のある「実の場」へと高めることにつながる。更に，どのように伝え合うのかといった身に付けた既習の学びの方法や技能を活用できることが必要となる。最後に言語活動を営む過程において常に課題や目標に照らして評価し，自らの言語活動を調整するメタ認知することが大切である。これら五つの言語意識(相手・目的・場面・方法・評価)を単元の中に位置付けることにより，一人一人の子どもが意欲的に「話すこと・聞くこと」の活動に取り組むのではないかと考える。また，指導する教師も，この言語意識を基に基礎的・基本的事項の定着を図ることができると考える。

【仮説２】
　学習によって身に付けた知識や技能を活用する場を工夫すれば，生きて働く言語の力を高めることができるであろう。

「伝え合う力」について，学習指導要領では「人間と人間の関係の中で，互いの立場や考えを尊重し，言語を通して適切に表現したり正確に理解したりする力である。」としている。こうした「伝え合う力」を育むためには，実生活に生きて働く言語活動を適切に取り上げて指導を行うことが重要である。それによって，活用する力，言い換えれば効果的に言語運用する能力(言語運用能力)を育成することにつながると考える。

【仮説３】
　言語環境を整えることによって，言葉への関心を高めたり，言語感覚を高めたりし，表現の意欲を高めることができるであろう。

言語を効果的に活用する力を高めるためには，言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整える必要がある。このことにより，言葉への関心を高めたり，言葉の使い方の正誤・適否・美醜などについての感覚を高めたり，語彙を広げたりすることができるのではないかと考える。

５　研究の視点と内容

(1)　研究の視点①　～　基礎的･基本的事項の習得　～

【研究の内容①】
・五つの言語意識を明確にした授業の構想
・「話すこと・聞くこと」の領域における学年の指導事項の系統化

(2)　研究の視点②　～　活用する場の工夫　～

【研究の内容②】
・指導事項を指導するのにふさわしい言語活動の選定
・言語活動の分析(言語活動の機能，表現様式)

(3)　研究の視点③　～　言語環境の整備　～

【研究の内容③】
・発表話型の見直しと意識化
・校内掲示の工夫
・言語スキルを高める場の工夫

6　研究の全体構想図

教育関係法規
日本国憲法
教育基本法
学校教育法
学習指導要領
県の教育施策
市の教育施策

学校教育目標
心豊かで，自主性・創造性に富み，たくましく生きる力を身に付けた子どもの育成

児童の実態
○知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力が十分身に付いていない。
○自分の思いや考えを他者に対して表現したり，他者の思いや考えを正確に聞き取ったりすることが不得意。

国語科の目標
国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し，伝え合う力を高めるとともに，思考力や想像力及び言語感覚を養い，国語に対する関心を深め，国語を尊重する態度を育てる。

「話すこと･聞くこと」の目標及び指導事項

〈 研究主題 〉
自分の思いや考えを伝え合う子どもの育成
～「話すこと・聞くこと」の指導を通して～

目指す子どもの姿
◇自分の思いや考えを自分なりの言葉で相手に分かりやすく話すことができる子ども
◇自分の考えと比較しながら，正確に聞き取ることができる子ども
◇お互いの考えを言葉で伝え合いながら，積極的に話し合うことができる子ども

【 研究仮説 】
1「話すこと・聞くこと」の領域における基礎的・基本的事項を確実に身に付けさせる手立てを工夫すれば，子どもたちの確かな言語能力を高めることができるであろう。
2　学習によって身に付けた知識や技能を活用する場を工夫すれば，生きて働く言語の力を高めることができるであろう。
3　言語環境を整えることによって，言葉への関心を高めたり，言語感覚を高めたりし，表現の意欲を高めることができるであろう。

研究の内容と視点
(内容①)
・五つの言語意識を明確にした授業の構想
・「話すこと・聞くこと」の領域における学年の指導事項の系統化
(内容②)
・指導事項を指導するのにふさわしい言語活動の選定
・言語活動の分析
(内容③)
・発表話型の見直しと意識化
・校内掲示の工夫
・言語スキルを高める場の工夫

検 証 授 業
計画・実践・分析・反省・考察

研究のまとめ
研究の成果と課題

次年度の研究

仮説検証授業1〔成果と課題〕

授 業 日	平成 23 年 9 月 26 日(月)
授業学級	３年１組（ 指導者 ： 久保 美子教諭 ）
単 元 名	話し合って決めよう「わたしたちの学校行事」(光村３年上)

【授業者反省】

成　果	○「相手」「目的」「場面」についてワークシートに記録し，学習の段階が変わる度に確認したことで，子どもたちがしっかり意識して活動できた。繰り返し確認できたことはとても良かった。 ○新しく学んだスキルを，次の時間に実践できたので，子どもたちが自分のスキルアップの手応えを感じることができた。学んだスキルを実際に活用する場を与えることで，スキルの必要性を感じ取らせることができた。
課　題	○本校児童のスキル不足を感じる。教科書で学んだことを実践する場が少ないため，話し合いに消極的になりがちである。経験値をつけることが必要であると感じた。 ○「話す力」には，かなりの個人差がある。ややもすると積極的に自分の考えを述べる児童に話し合いの流れを任せてしまう。「話す力」は，繰り返し経験して自信を付けていくことでしか身に付かないと思う。ここでもやはり経験する場の確保が必要となる。
改善策	○５つの言語意識をもたせて指導していくことは全学年を通して実践していく方向でいいと思うが，低・中・高学年それぞれでの重点部分を決めて，その点はしっかりと定着させていけば学年が上がるにつれて，積み上げができて良いのではないかと思う。

【授業検討会】

検討の視　点	〔視点１〕　５つの言語意識を児童に常に意識させる工夫 〔視点２〕　基礎的・基本的事項を確実に身に付けさせる手立て 〔視点３〕　言語活動の位置付けと指導
成　果	〔視点１〕　「相手」「目的」「場面」について，ワークシートに記録し，学習の各段階で確認することで，しっかり意識させることができた。ネーミングも良かった。 〔視点２〕　司会者カードを活用した話し合い活動により，スキルアップを図ることができた。スキルの必要性も感じ取れたようだ。「声のものさし」の活用も良かった。 〔視点３〕　グループ編成や机間指導が適切になされていた。途中で話し合いの視点を確認することで，意欲の持続にもつながった。ワークシートの表紙に単元全体の流れが示してあるのは良かった。
課　題	〔視点１〕　５つの言語意識を基に，情報の価値をどう認識させるか，他教科との関連を図りながら指導していく必要がある。 〔視点２〕　教科で学習したこと(話し方・聞き方，インタビューの仕方，メモの

	取り方)を生かせる場を多く設定することで，話し合い活動等のスキルアップを図る必要がある。 〔視点３〕　つまずきや個人差に対応するために，どのような言語活動を取り入れ，どのような力をつけていけばよいか整理する必要がある。
改善策	〔視点１〕　５つの言語意識を他教科等でも常に意識させるために，キーワードをカードにし，目に触れられるようにする。指導に当たっては，低・中・高学年で重点的に意識させる点を決め，定着を図っていく。 〔視点２〕　基礎的・基本的事項(話し方・聞き方・インタビューの仕方，メモの取り方等)が，国語科(教科書等)でどのように取り上げられているか整理し，(ガイドブックの作成等)，当該学年において他教科等でも繰り返し指導(訓練)し，定着を図っていく。上学年において，基礎的・基本的事項の定着が不十分な児童については，ガイドブック等を活用し，スキルアップを図る。 〔視点３〕　学年の発達段階に応じた司会者カードを作成し，国語科だけではなく，他教科等におけるグループ活動にも積極的に活用させる。グループ活動における教師の支援の在り方も，今後研究する必要がある。学び合いにつながる話し合い活動の充実を図る。話し合いの大切さを児童に理解させる。

仮説検証授業2〔成果と課題〕

授　業　日	平成 23 年 10 月 31 日(月)
授業学級	６年３組（ 指導者 ： 西山 修平教諭 ）
単　元　名	自分の考えを明確に伝えよう「『平和』について考える」(光村６年下)

【授業者反省】

成　果	○「目的」等を教室に掲示しておくことで，いつでも確認ができ，子どもたちも意識することができた。 ○発表原稿のモデルを示すことで，子どもたちも活動に見通しをもって取り組むことができた。 ○話すポイントを絞ったことで，子どもたちも意識して練習に取り組んでいた。
課　題	○発表の練習に時間がかかってしまった。 ○聞く側の子どもたちがメモを取るのに必死で，発表者を見ていなかった。 ○「目線」など，もう少し６年生らしいポイントを示せればよかったが，子どもの実態に合わせて決めたので，それまでの積み上げが大切になると思う。
改善策	○事前に収録しておいて，それを見合う活動でも良かったかもしれない。授業者としては，みんなの前で話す経験をさせたかった。 ○グループ活動だったが，中心となった頑張る子どもとそうでない子どもがいた。(グループの人数を５人から４人に減らしてもよいのでは) ○単元の指導だけでは定着させられないこともあるので，継続してスピーチやメモに取り組んでいく必要がある。 ○批判的思考や客観的なものの見方が経験不足のため，意見文を書く際に困っていた。しかし，説得力がある文章に必要な構成を理解できた。

【授業検討会】

検討の視　点	〔視点１〕　５つの言語意識を児童に常に意識させる工夫 〔視点２〕　発表のプロセスに沿った適切な支援 〔視点３〕　言語活動の位置付けと指導
成　果	〔視点１〕　相手を意識して話すことができていた。 〔視点２〕　発表がパターン化されていることで，ニュース形式の発表の仕方について学び取ることができ，スキルの定着が見られた。本などの資料収集の支援もよくなされていた。 〔視点３〕　映像を活用したり，身近な出来事から内容に迫ったりと，発表内容も分かりやすくまとめあげることができた。
課　題	〔視点１〕　発表したことについて，聞き手から反応がないため，発表者として手応えがなかったのではないか。意見交換があった方がよかったのではないか。タイトルや要旨を発表の前や後に掲示してもよかったのではないか。 〔視点２〕　全部のグループの発表について感想や意見を書くのではなく，自分の意見文に影響を与えそうな発表を選択してワークシートに書き込むという方法はどうだろうか。聞きながらメモを取るのは忙しそうだった。効果的なメモの取り方を指導していきたい。 〔視点３〕　声の強弱，間の取り方など，より分かりやすく伝えるための手立てを学ばせたい。自分の意見を聞く人に効果的に伝えるための発表の工夫を指導していきたい。（このように，つまり，要するに を入れる等）
改善策	〔視点１〕　文字にすることで効果的に伝える。 〔視点２〕　朝の活動等を使って，メモする力を向上させる場を設けてはどうだろうか。 〔視点３〕　学ぶことは「まねる」ことからなので，良いモデルを示して，経験を積ませていくようにする。